

## 善導の厭欣思想の研究

池 見 俊 夫

厭欣思想の「厭」即ち「厭離穢土」は、人生の否定を意味する。これをもつて人は、厭欣思想に対し、不明朗且つ不健全な、少くとも非近代的なムードを連想しがちである。

しかし私は、厭欣思想は悲観的なものでないどころかむしろ積極的に人生を力強く肯定するものであると考える。では、人生の否定を標榜しつつ、しかも現実を肯定するとは如何なることであるか。またそれは、釈尊の眞精神に適うものであるか。そこで否定されるものは何か。何の爲の否定か。

善導の厭欣思想が、純粹にして生々發瀾たるものであることを疑わない私は、右の諸点に留意しつつ、その思想を考察してみたいと思う。

凡そ仏教の本質は、人生を否定することにある。釈尊の弟子達に対する最も嚴肅なる教は、常に人生の否定で

あつた。であれば、全仏教徒は悉く仏教的厭世觀をもつべきである。然るに厭世思想は善導にのみ特に強く見らる。それは何に由るのか。即ちその思想的母胎、及びその基調となすものは如何。先ず思想的母胎としては、善導個人の人間の資質、歴史的背景、先師との思想的關連が考えられるが、今、思想的關連のみ述べるならば、師道緯が、人間觀の状況を「末法狀況下」に限定された五濁の世に置くに對し、善導は「三時の制約を越えた」ところの五濁惡世に置ている。この差異は如何なる意味をもつか。即ち、前者は「濁惡の世」そのものを悲嘆するに對し、後者は、環境を濁惡たらしめてゐる自己自身——本論では「宿惡」と呼ぶ——を悲嘆するものである。ここに、彼独自の、即ち罪惡觀を基調とする厭欣思想が芽生える。

その罪惡觀を、今、信機より考察する。信機とは、自己が自身に對して否定的に對決し、人間性の立場から、自己自身の有限性、主觀性を否定することから始められるものであるが、それは、人間のもつ理性能力を燒尽することによつて「信機」にまで高められる。そして、自

己がすべての理性能力を焼尽し、自己が限界状況を直視する時、自己が救われないままに放置されていることに気づく。このように自己を救われないままにしてしまつたもの、自己をして自己に絶望せしめたものを仮に悪と名づけるならば、それは「絶対悪」である。故に、この悪は三才の童子と雖も内に有するものである。

右の如き罪惡觀をその基調とするからこそ、淨穢不二の立場を離れて、深刻な穢土觀をもつに至つたのである。現実の世相と自己の心相の關係は、心相（惡）が作している罪障によつて汚染せられている世相であり、此土を穢土たらしめているのは自己の心相であるとする。さて自己の絶対惡に逢着して求められる淨土は如何。即ち自己の惡への徹底的な否定の極限に於て見出される世界であり、此岸的な世界と隔絶する高次元の、真に絶対の世界として悟界と呼ばれる淨土でなければならない。しかも、その莊嚴、及び指方立相は、私に対する眞実の相を知らしめんが為のものであり、又、自身の必然性としてかくあるべきだということを離れて生きていけない人間に対して、これこそ求めざるを得ない眞の生活であると

示してくれたものが、淨土の相であることを知る時、淨土は実在問題と離れて、我々に重大な意味をもつてくるのである。人生の破綻者が否応なく求めざるを得ない世界が淨土であれば、我々は大悲の意をそのまま信じて、現実の生活を生きることこそまさに「救いの道」を歩むことなのであり、「救いの道」を歩むことこそ、眞に現実の生活を生きることなのである。かくて、善導の厭欣思想は、獨惡なる現実（自己）に対する絶対の否定を通して、再びそれを高次的に肯定するものであつた。従つて、それは所謂「厭世觀」とは次元を異にする。生命ある生々發瀾たるものなのであり、そのことは、彼の教化活動に最もよく現われており、同時代の道宣の記述はそれを強く明示している。